



イラスト：佐藤アモール陽子

PARADISE YAMAMOTO

東名高速の東京インターの入口にあるマクドナルドで朝食とって、そろそろ行くかあとか言ってるのが午前9時。そして長崎に着いたのが翌朝ちょうど午前9時。凄いハードな二十四時間。だいたい今ロンドンとかだって飛行機で十二時間もあれば着くでしょう。もうロンドン行って帰ってこれる時間クルマにひしめき合って乗っていたなんてまるでお馬鹿。往きのドライバーは、私とアルトサックスの渡辺一浩。他のみんなは免許持っていないも、徹夜あけだったり、体調が優れなかったりして結局2人で片道千四百キロを交替して運載していきました。でもよく考えたら、佐川急便の運転手さんなんて毎日そのくらい走っているでしょう。それに佐川急便の方ってクルマから降りても、歩いているの見たことないでしょう。いつも

ウンは多いし、やたらと「この先事故多し」なんて看板ばかりで、だっただら最初から事故起きないような道をつくれ！って腹立ててみたり、お約束の速度自動取締機も、走りなれない道ではいつどこで登場するかわからなかったりで、普段より気ひきしめて運転していたもんだから、クルマから降りたら、もうふらふらでした。

マンボバスというのは、カーステレオでガングランにマンボをかけながら、窓という窓は全部開けて、おなじみのフリフリの衣装を全員身にまとい、上半身を外にのりだしてギョウマラカスを鳴らしながら、団体旅行のバスに追いついたり追いつけたりというのが決まりです。そんなこといったら誰が決めたんだ。当然ドライバーも、股にボンゴを挟んで空いているほうの手で叩きながら運転しま

カインターチェンジを出るまでの比較的長いお付き合いです。九州からの帰り、博多の公演の打上げ会場のもつ鍋屋で食べたレバー刺に大当りしてしまつた私と渡辺一浩は、もちろん運転などできるはずもなく他のメンバーに代わってもらい、東京までほとんど全てのパーキングエリアに立ち寄りなければならぬほど悲惨な状況で旅の結末を迎えました。

着倒れ京都人に送る。

ササイな情報

16

「スカヤパレツリ」(バルコ出版)、「マドレーヌ・ヴィオネ」(求龍堂)と、ファッション史の中で決して忘れることのできない二人のデザイナーの作品集が相次いで出版された。折しも、パリでヴィオネの自宅を改造してオープンしたジル・サンダーの新しいブティック(ルイ・ヴィトンの隣です)を見てきたところ。「エッセンス・オブ・クオリティ」(コム・デ・ギャルソン作品展、93年6月)、「三宅一生の「ブリーツ・プリース」」とヴィオネ再評価の機運が高まるなか、この本は貴重である。スカヤパレツリはダリとの交友関係でも有名な人。以前スペインのカダケス(ダリ美術館のあるところ)へ行ったときに、彼女のデザイン画をプリントしたエプロン、ということんでもない土産物を目にしたが、今思うと買ってあげれば良かった、と後悔している。アパレルデザイナーを自称するお洒落さんやデザイナー

予備軍には少なくとも、彼女の生き方や作品を知った上で発言して欲しいと、最近特に強く思う。「モードを破壊する」なんて言葉は、そう簡単に口に出せることではないです。いづれにせよ二人ともモードのデザイナーとしては、これまで異端として捉えられていた人だけに、こういう本が出版され、服のデザインというものが、再びアーティスティックな方向に変わっていくだろうことは喜ばしいことである。しかしながら、それぞれ3万円を超す豪華本は簡単に手が出ない。

だから、ということでもないが、「THE END OF THE GAME」(リプロボイト・5800円)を買って帰る。この本の作者であるビーター・ピアードという文化人類学者兼写真家に魅かれるのは、ファッションとは正反対のベクトルに、彼がい

るからかもしれない。アフリカ大陸に象の死体が横たわる空撮写真が実に良い。「ヴィオネ」「スカヤパレツリ」「ヴェルサーチ」「カール・ラガーフェルド」と散々本屋でページをめくったあげく、結局買ったのがこの写真集とは、買い物同行者に「お前の頭の中は、どうなってるのかよう分かるん」と呆れられた。

プロフィール 1959年京都生まれ。旅行通信社・WWDジャパン編集者として、東京中心のファッション情報に携わり、10年以上にわたって世界の服飾産業を見続けてきた。91年より大塚の遊女町の遊女デザイナーのショー

そのビーター・ピアードのインタビュがある雑誌に載っていて面白かった。建都1200年に合わせ、さまざまな雑誌が京都特集を組み、いろいろな分野から京都に対するコメントが寄せられていた。そのなかでわたしに対して説得力があったのは、このビーター・ピアードの発言だけだった。「京都もアフリカも状況はさして変わらない」。

東京では6月にダイアリストとしての彼の展覧会があったが、残念ながら行けなかつた。関西ではやらないのだろうか。日本で彼の展覧会をやるのなら、東京より、京都の方が適したスペースがいくらでもあると思うのだけれど。本の話ははかりになったが、京都に縁のある女性のトリビュート写真集があるのでそれを最後に紹介しておく。

【プロフィール】 元東京ハノラマ男子ボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた。初代レガシィクーリングワゴン、アルシオーネS・VXなどのデザインを手掛ける。新番組、土曜夜7時からの「テレビの上様」(TBS系)でもマシコなコラムニストとして活躍中。マシコの家リマチアキラといっしょに東京ラテンモードデラックスも現在全国ツアー中！タイムストップスと共に関西、今後クラブのフライヤーは要チェックね！

NODA TATSUYA